

69. 彦根市妙楽寺遺跡の 木製品

1. はじめに

本遺跡は、彦根市日夏町字妙楽寺の西側に広がる水田地帯に位置し、従来より土師器・須恵器等の遺物散布が確認されていた。

昭和55年度のは場整備事業により掘削を受ける水路部分について、4月10日より約2ヶ月間を要して調査を実施した。

その結果、弥生時代後期から平安時代後期の各時期にわたる溝跡・土壇跡・掘立柱建物跡が検出され、それに伴う遺物も多数出土した。

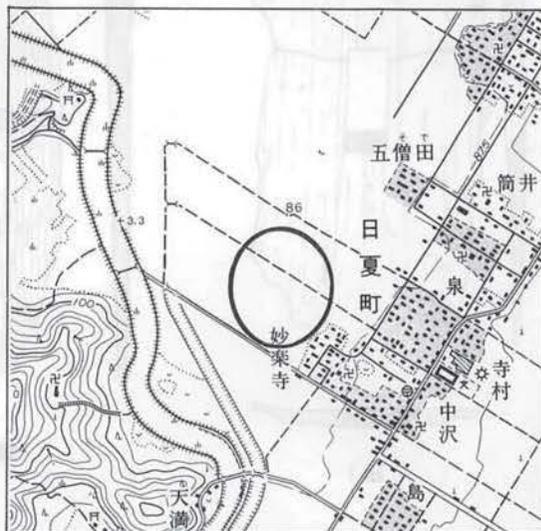
現在、遺物等を整理中であり、今回は整理終了した弥生時代後期後半の溝跡出土の木製品について紹介したい。

2. 遺物について

ここで紹介する木製品は、鋤2点・鉄1点・紡織具2点・粘状木製品1点・用途不明品1点の計7点である。

鋤1 身と柄を別木で作り、組み合わせ着柄鋤で身のみが遺存する。身の現存最大長24.7cm、幅14.2cm、厚さ1.1cmを計り、全体に縦長でやや反りを持ち、身と柄を固定するための着柄軸と柄孔をつくり出している。着柄軸の断面は台形又は半円形を示し、長さ5.9cmで、先端には柄との装着を有効にするための隆起を削り出している。柄孔は長方形を呈し、縦6.0cm・横2.5cmで、身に対して約40°の角度で、刀子状のもので鋭く穿たれている。下面の身と着柄軸の間には、軽く段を設けている。

鋤2 柄の部分が欠損しているために、長柄鋤か着柄鋤か不明である。身の現存最大長26.2cm、幅8.1cm、厚さ1.5cmを計る。身は狭長で幅の3倍以上を呈する。肩は、現在丸くなっているが製作当初は、角張っていたものと考えられる。柄又は着柄軸から身にかけては、全く反りを持たず直線的で、先端部にいくに従って薄く仕上げる。柄又は着柄軸の断面はほぼ方形を呈し幅2.7cm、厚さ1.5cmであり、長さ4.9cmを現存する。柄又は着柄軸(身より1cm程の位置)に紐で縛ったような痕跡をとどめる個所がある。



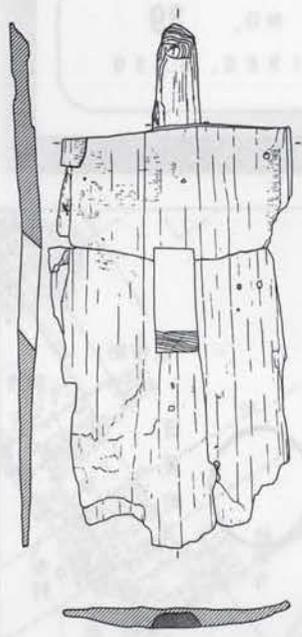
位置図 1:25000

鉄1 舟形突起を有する鉄で一部柄が遺存する。材質はカシ。身の現存最大長25.8cm、幅8.2cm、厚さ2.7cmを計る。身の形状は、頭部が丸く、幅・厚みを減じながら先端部に及ぶ。先端部の横断面は、台形である。舟形突起は、基部のみを遺存し、身の頭部先端よりやや下から削り出されている。形状は、上端が丸く下端が三角形を呈する。中央部には、直径3cmの柄孔が約70°の角度で穿たれている。柄孔には、柄の一部が残存しており柄の直径は、柄孔よりやや小さめである。舟形突起の裏面頭部には、厚さ1.1cm、長さ3.2cmの段を有する。

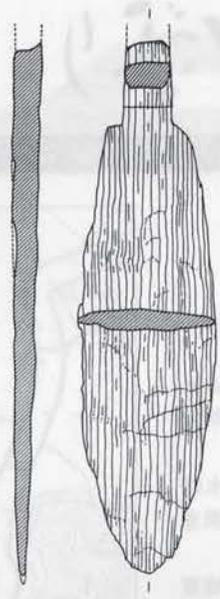
紡織具1 布巻具(ちまき)あるいは、経巻具(ちきり)に考えられる木製品で、ほぼ完形品である。全長74.6cm、直径2cm程の細長い棒の両端を一方向から切り込みを入れて、突起を削り出す。さらに、両端の一部を切り込み、面取りする。このため突出部の断面は、○形を示す。

紡織具2 一端を欠損しているが1と同様の形態を示すと考えられる。現存長は50.4cm、直径1.7cmである。突起の削り出しは1と若干異なり2方向から切り込みを入れる。よって断面も1と違い円形を呈す。2は1と比較してやや小振りである。

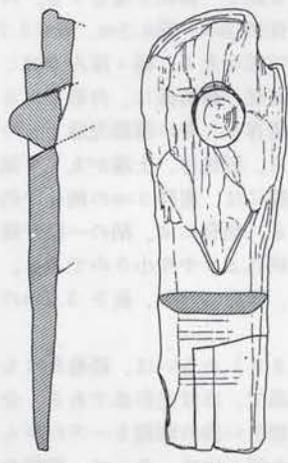
1・2いずれも糸の擦痕などの使用痕は認められない。



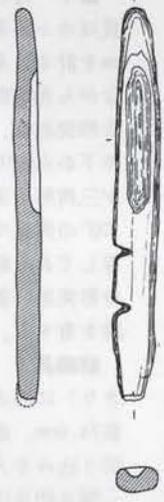
鋤 1



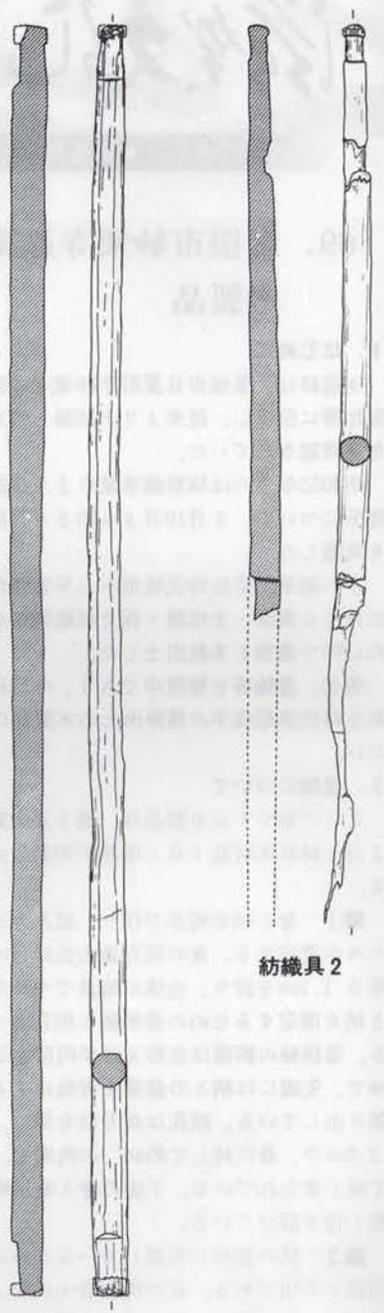
鋤 2



鋤 1



用途不明品

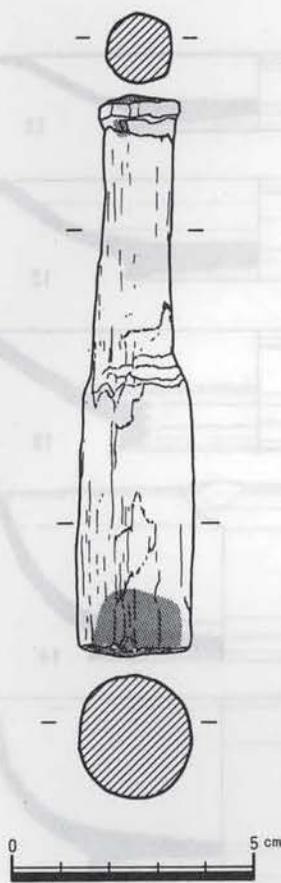


紡織具 2

紡織具 1



妙楽寺遺跡出土の木製品



砧状木製品 小型の砧状木製品で全長11.6cm、榎部の直径2.3cm、柄部の直径1.7cmを計る。榎部と柄との境は、余り明瞭でなくゆるやかに仕上げてある。榎部と柄部の長さは、ほぼ同一である。柄の先端は低い突起を削り出している。榎部及び柄部の端面やその周囲に朱が塗られているが(図のアミ部)、彩色が全面に施されていたかどうかについては明らかでない。

用途不明品 全長22.9cm、幅2.5cm、厚さ1.5cmを計る木製品である。両端は丸く、側面には二ヶ所の切り込みがみられた。この切り込みは、

刀子状のものでされたと考えられる。上面の片方には、

長さ8.5cm、深さ6mmの楕円形の切り込みが認められる。使用目的については明らかでない。

3. まとめ

以上、弥生時代後期後半の溝出土の木製品について概観してきたが、小稿の結びに当って二・三気付いた点について述べておきたい。

鋤1は、遺存状態から未完成品とは考えにくく、草津市志那中遺跡(註1)・長浜市鴨田遺跡(註2)出土の同形態の鋤とは、柄孔に挿入した柄を受けるための着柄溝がない点で異なり新資料となりうるものと思われる。着柄方法は解らない。鋤は、側面に明確な加工痕が見出せないため、広鋤か狭鋤かあるいは、広鋤を狭鋤とし再利用したものか不明である。又、柄の装着方向も舟形突起の方向か、その裏面の方向にとりつくのか、柄の材質が、非常に軟らかく摩滅が激しいため不明であるが、やはり身と柄孔との角度からみても舟形突起の裏面方向にとりつくと考えた方が妥当であると思われる。最後に砧状木製品であるが、小型で朱を施してあることなどから、実用品でなく祭祀用に使用されたと考えられる。この様な類例は、若干時期が異なるが古墳時代の石製模造品の中にみることができる。(註3) (北川 浩)

註(1)大橋信弥・谷口徹「草津市志那中遺跡の井戸2例」(滋賀県文化財保護協会)『滋賀文化財だより14』

註(2)中谷雅治ほか『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書II』(滋賀県教育委員会1973)

註(3)『世界考古学大系III』(平凡社)群馬県稲荷山古墳出土の滑石製杵がある。

70. 水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について

本窯跡は先年灰原の一部が調査された春日山の神古窯跡^{註1}の北側に存在し、灰原の状態から二基が併存すると考えられる緑釉の古窯跡である。詳細は後報に譲り遺物について概述する。

採集した遺物に緑釉は少なく、その90%は硬陶である。緑釉は刷毛塗で、二次の焼成により、三叉トチンを用いている。

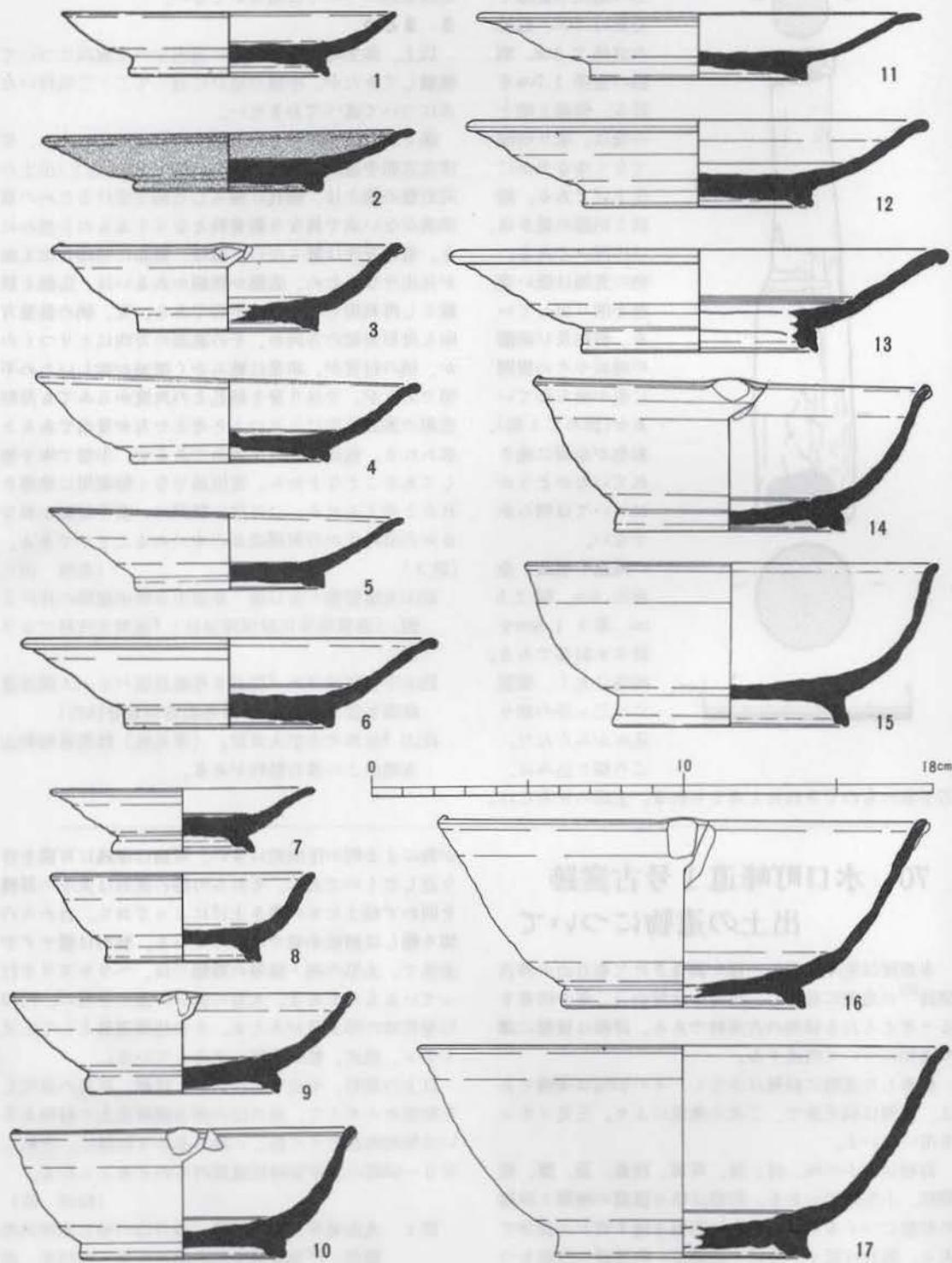
器種は大小の埴、鉢、皿、耳皿、段皿、盃、甕、長頸瓶、小型甕等がある。形態は略々該期の陶器と同様の形態につくるが、器内面に凹線を施す例が大部分である。高台は低く、外周で接地し、向地面に凹線をつける近江特有の高台である。その他各器種に輪花を施す例が多く、指によるものやへらによるもの各種ある

が指による例が圧倒的に多い。耳皿は単純に耳部を折り返したものである。それらの器の成形は大小の器種を問わず粘土ヒモの巻き上げによっており、台からの切り離しは回転糸切りによっている。整形は横ナデが主体で、大型の埴・鉢等の器種では、へらケズリを行っているものもある。大型の甕は外面に平行の、内面に菊花状の叩き目がみえる。その他窯道具として三叉トチン、焼台、整形具等が出土している。

以上の器形、手法等の特徴や、段皿、耳皿の退化した形態から考えて、春日山の神古窯跡出土の緑釉あるいは無釉陶器のうち新しい期のもと同様に、それらは0-53期の、平安時代後期のものと考えられる。

(松沢 修)

註1 丸山竜平、山口利彦「春日山の神古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』1975年、滋賀県教育委員会)



峰道1号古窯跡出土遺物実測図 2は緑釉で他は施釉前のもの 15は2号窯跡